

第8話 北條高時の失政

げんこう ざいせい こんなん おちい きゅうぼう きわ
 元寇以後、幕府の財政は困難に陥り、武士もまた窮乏を極めていたのに、執権の
 たかとき あんぐ みはな
 高時は暗愚で、悪い政治ばかりしていたので、北條氏は世の人々から見離される。

元寇戦後の財政困難

げんこう こくなん ときむね しよち しゆび げきたい かえ
 元寇はわが建国以来の国難であったが、執権時宗の処置がよかったので、首尾よくこれを撃退して却
 こくい あ えいきよう
 って国威を揚げた。けれども、それが後に残した影響もまた大きかった。

すで ぶんえい こうあん ぼうび ゆる
 既に述べて置いた通り、文永、弘安の二度の戦いばかりでなく、前後30余年間も防備を弛めずに置
 よう ぐんび ぼくだい やすとき ときより りょうせい ほどこ
 いたのですから、これに要した軍費は莫大なものでした。北條泰時、時頼らの名執権が良政を施し
 ゆた ざいせい こんなん おちい せんしょう いの きしん ぐんこう
 た結果豊かだった幕府の財政も困難に陥ったのに、戦勝を祈った社寺への寄進や、軍功のある将士へ
 おんしょう ぜひと くんしょう ねんきん さづ す
 の恩賞は是非共しなければならぬ。今日では、勲章とか年金とかを授けてそれで済むのですが、昔
 おんしょう きしん りょうち あた ふつう
 は、恩賞とか寄進といえは領地を与えるの普通でした。

こくない むほんにん う あいて ほろ しりょう ぼっしゅう
 ところが、これが国内の謀反人を伐ったのであれば、相手を滅ぼすと、その所領を没収するので、
 う ほら
 それを分けて部下の恩賞に与えることが出来ますが、今度は外国から来た敵を撃ち払ったのであって、ど
 せんりょう だれ ぐんこう はなは きしん よう
 こを占領したのでもなく、誰を滅ぼしたのでもないから、軍功のある将士は甚だ多く、寄進を要する社
 いた ところ あた
 寺は到る処にあるにもかかわらず、与えるべき土地は少しもないのです。

ひじょう こま
 幕府は非常に困ったが、どうすることも出来ない。しかも一方では、戦いに勝ったというので、武
 き おご しゃし かたむ もちろん やくそく おんしょう あ
 士の気が驕って、奢侈に傾くようになって来ていた。勿論、彼らは約束の恩賞を当てにしていたの
 あた きゅうぼう しんよう
 です。ところが、それがいつまでも与えられないので、いよいよ窮乏すると共に、おいおいと幕府を信用
 しないようになって来ました。

内管領の我侷

こんなん おさ よほど だいじんぶつ ときむね
 こういう困難な世の中を治めていくには、余程の大人物でなければならぬのに、執権北條時宗の
 つ さだとき ようや
 亡くなった後を継いだ子の貞時は漸く14才の少年でした。しかも、幕府の執権はこのころから
 ないかんりょう うつ じゅう ふ ないかんりょう
 内管領の手に移っていたので、執権の権力さえも自由には振るえなかった。内管領というのは、執権
 かせい と かるうしょく ごと
 の家に置いて、主として家政を執らせたもので、いわば執権の家老職の如きものです。それが、今は天
 せいち わたくし こくたい
 下の政治を私するようになったのですから、実におどろくべき事だが、これはわが国体の上からいって、
 ちよくせつ せいち はず か と すで あやま
 天皇が直接に政治をなさるべき筈であるのを、将軍が代わって政治を執ることになったのが既に誤って
 いたのに、その将軍をさしおいて執権が実権を握るようになったのです。根本のひとつを誤ったため
 しだい おか けんりよく うつ じょう
 に、次第に下の者が上を犯して権力が下へ下へと移っていったのです。いうまでもなく、こういう状
 たい ひじょう へんたい つづ はず
 態は非常に変態ですので、いつまでも続く筈はないのです。

さだとき せいじん おご きわ ふちゅう ないかんりょう ちゅう こころ もち そふ
 さて、貞時は成人の後、驕りを極めた不忠な内管領を誅したりして、政治の心を用いて、祖父の
 ときより あと した もっぱ けんやく おも じんけい こころが すで ちほう みだ やくにん たみ
 時頼の跡を慕って専ら儉約を重んじ、仁恵を心掛けましたが、既に地方の政治は乱れ、役人は民を苦

第8話 北條高時の失政

しめて頻りに諸税を重くしていたし、一族や親戚の中にもわが侘な者などがあったので、逆も昔のよう
な公平な政治は見られなかった。

執権 北條高時の暗愚

こうして北條貞時の子の高時が執権になった時には、幕府の政治は大いに紊れ、北條氏の信用はますます失われていたのですが、北條高時は生まれつきわが侘な愚物であった上に、執権になった時がわずかに14才でしたので、政治の事は一切内管領の長崎円喜やその子の高資らに任していた。ところが、この高資は頗る無道で欲が深く、訴訟などにしても、賄賂の多少によって曲直を決するという風でしたので、常に不公平のことが多い。北條氏の政治の生命ともいべき公平や仁慈などは全く廃れ、人々はますます苦しむばかりでした。

ある時、陸奥の安東五郎三郎季久という者が同族の又太郎季長と所領のことで争って、幕府にこれを訴えた時に、内管領の長崎高資は双方からしばしば賄賂を取ったので、久しく判決を下すことが出来ずにいた。2人共大いに憤って国に帰り、おのおの兵を挙げて合争ったので、幕府は兵をやって鎮めさせたが、却って打ち破られて、東北地方は大いに乱れた。この乱は後にやっと鎮定することが出来たが、これ以来、幕府の実力の既に大いに衰えた事が天下に暴露して、その風聞はまもなく京都及び諸国にも伝えられた。

田楽

しかし執権高時は、成人の後にも一向に政治を顧みず、日夜、酒宴や遊興に耽っていた、そのころ、田楽という一種の舞が京都に流行していたが、彼はそれを聞くと、わざわざ大勢の田楽法師を京都から呼び集め、主なる家来連中に1人ずつそれを養わせて置いて、殆ど毎日毎夜のように酒宴を開き、立派に着飾らせた其の法師らに舞い踊らせた。

もともと田楽は、農夫の労を慰めるために、笛、太鼓に合わせておどったものだが、後にだんだんと変化してひとつの芸事となり、所謂田楽法師のする業となってからは、茶番狂言や軽業なども加わったのです。高時は大勢の家来らと共に酒を飲みながらこれを見て喜んで、舞い終わると、めいめい着ている衣装を脱いで褒美に与えたりした、それに、法師の服装も毎度新しいものに替えさせるという有様でしたので、それやこれやで田楽の費用も大変でした。

闘犬

一層ばかばかしいのは闘犬でした。高時は、ある時、庭前で犬の噛み合うのを見て、面白いことだと思ってから、これを非常に好んで、強そうな犬を飼っては戦わせたが、後には諸国に令して、租税の代りに強い犬を納めさせた。それで、鎌倉には常に4~5,000匹の犬がいたが、これらの犬には魚や鳥の肉を飽くほど食べさせて大事にして置き、毎月12回の犬合わせの日に、両方の陣から100匹とか200匹のと放し合わせたので、犬共は入違いに追いついて、上になり下になりして噛み合った。その声が天を響き地を動かすのを、高時は一族を始め、多くの家来らと共に、座を列ねて酒を飲みながら、心地よげに

第8話 北條高時の失政

けんぶつ
見物するのはです。

これだけでも随分野蛮な話であるのに、後にはこれが一層嵩じて、犬には皆美しい着物を着せ、繋ぐにも金銀の鎖を用いて、殊に勝負に強い犬には錦の着物を着せて、駕籠に載せて昇いで歩かせた。これに出逢えば、騎馬の武士もわざわざ馬から下りて、うやうやしく犬にむかってお辞儀をしなければならなかった。何という馬鹿げた事であったでしょう。

げんこう こくなん
元寇の国難の後で、いくら節約を重ね、質素に質素を以ってしても、なお足らない北條氏を見限るようになつて来ました。

(第8話 北條高時の失政 終わり。 次は前頁に戻り、 第9話 正中の変と元弘の変 へ)